

「チャンギ空港の現状と拡張計画」

シンガポールが世界に誇るチャンギ空港。2024年の利用者数は6,770万人と、コロナ前2019年の6,830万人にもう少しのところまで持ち直しました。シンガポールに住んでいると、旅行に出張にと1年に何度も利用するのですが、今回、空港利用者が普段は見ることができない空港のバックヤードを見せていただく機会に恵まれましたので、その様子もあわせてチャンギ空港の現在と将来計画をご紹介します。

＜自動化で人手不足に対応＞

年間33万回以上の離発着（1日平均906回）があるチャンギ空港。到着してから最初の荷物がターンテーブルに出るまでの目標は15分、チャンギの旅客数の3割を占めるまでに成長した格安航空会社のターンアラウンドタイム（*1）は45分、さらに人手不足という状況に対応するためには、あらゆるオペレーションを効率化する必要があります。自動化は必須で、2024年3月から無人の荷物輸送車、2024年11月からエアブリッジ（*2）の自動ドッキングの試験運用を開始しています。

（*1）着陸した飛行機から乗客と荷物を降ろし、機内を清掃し、燃料を補給し、備品や食料などを補充し、新しい乗客と荷物を乗せ、再び出発するまでの時間
（*2）空港のターミナルと航空機をつなぐ接続設備

＜消防、冠水やバードストライク対策＞

幸い、過去、チャンギ空港での事故発生はゼロですが、いざというときの備えとして各滑走路二カ所で合わせて500人の消防員がシフトで働いています。空港中の雨水をいったん留置して冠水を防ぐ貯水地は、オリンピックサイズのプール350個分の水を貯められる大きさです。また、バードストライクを防ぐため、安全検査チームが毎朝、飛行場を見回り、滑走路付近で鳥が確認された場合は、長距離音響発生装置などを使って対策をしています。

周辺アジア各国も含め、数多くの市場・企業など調査業務実績を持つ。グループ会社の Crossborder Pte Ltd と二人三脚で、日本企業の M&A、現地パートナーシップ構築を準備段階である川上の調査から実施段階である川下のコンサルティング / アドバイザリーまでのサービスを提供。高い情報収集能力で企業の商談、進出、会社運営をきめ細かくサポート。



＜ターミナル5（T5）を開発中＞

チャンギ空港の現在の旅客処理能力は9,000万人で、まだ十分余裕はあります。しかし将来に向けてすでに処理能力5,000万人、1,083ヘクタールの広さのT5の開発を始めています。T5はこれまでと異なり、1つの大きなターミナルとサテライトを建設し、ターミナルとサテライトを地下を走るSkytrainでつなぐことで効率化を図ります。

また、T5には、MRTのトムソン・イーストコースト線が乗り入れ、タナメラフェリーターミナル（インドネシアの島やマレーシア・ジョホールへの航路）にも隣接して、ますますアクセスがよくなります。現在、商用に使われている滑走路は2本ですが、軍用の滑走路1本を2,750メートルから4,000メートルにして、民軍共用の滑走路とし、2020年代半ばには3滑走路体制になる予定です。



【到着したばかりのシンガポール航空機】



【A380に機内食搬入中】